

論文の内容の要旨

論文題目 日本、トクヴィル、そしてアメリカ
—近代日本におけるトクヴィルの政治思想の受容

氏名 柳愛林

本論文は、明治・大正および昭和期の日本における、フランスの思想家アレクシ・ド・トクヴィル(Alexis de Tocqueville, 1805~1859)の政治思想を軸とした西洋思想の受容史に関する研究である。地域をこえて地球規模に広がる政治思想の相互影響のありさまと、一九世紀から二〇世紀にかけての変容を明らかにすることを試みる。

今日のグローバル化の原初形態ともいえる、「開国」期の日本社会における多様な思想の交流のありさまをトクヴィルの政治思想を中心に明らかにすることで、現代における社会と思想の変容を、歴史的な深みと、地域をこえた視野の広がりの中に位置づけて再考する。

まず、明治初期から昭和期に至る、近代日本の長い時期を包括的に対象とし、トクヴィルの政治思想がどのような形態で受容されてきたのかを跡づけたいと思う。従来も、トクヴィルの思想の日本への受容については、優れた先行研究が少数ではあるが存在する。だがそれらはいずれも一人の思想家の特定の時期の著作に限られた研究がほとんどであった。例えば、福沢諭吉の「分権論」に『アメリカのデモクラシー』が与えた影響に関する研究が代表的である。また、地方自治思想に関する研究のような特定のテーマに限られた研究がほとんどであった。

この論文ではそうした先行研究に関する反省をふまえ、自由民権の思想家から、明治期の地方自治論と宗教論、女性教育論まで、幅ひろい思想のテキスト群からトクヴィルの影を発掘する。また、今まで注目されなかった福地桜痴らの革命論にトクヴィルが与えた影響も取り上

げる。そして、その時代による変化と、背景となる政治・社会の変容との関連を総合的に解明することがこの論文の目標である。

以上の課題を近代日本におけるアメリカ観の変化と関連させて研究する。『アメリカのデモクラシー』で知られるトクヴィルの著作は、日本においても西洋諸国においても、まずアメリカ論として読まれた。トクヴィル観の変遷をたどることは、日本人のアメリカ観という大問題に、思想史の新たな視点からとりくむことを意味する。

最後にトクヴィルの忘却についても研究する。トクヴィルは『アメリカのデモクラシー』の刊行と共にヨーロッパやアメリカで大きい注目を浴びるが、ある時期は完全に忘れられ、忘却される。このような現象が日本の思想界でも起こったことを証明し思想史やその受容史の普遍性と特殊性を明らかにする。

論文は主に三つの章で構成される。肥塚龍による最初の日本語完訳である『自由原論』を分析しその意義を明らかにする第一章、トクヴィル思想が多様な領域に受容されたことを「宗教」、「女性教育」、「地方自治」などのキーワードを中心に明らかにした第二章、トクヴィルの「忘却」が日本にも該当することを証明しその原因を西洋のそれと比較分析した第三章である。論文の最後にはトクヴィルが言及され、彼の思想の受容の様子を分析するために使った文献のリストをつけておく。